



TITLE:

11 野生チンパンジーの肉食における狭食生の研究(X.共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

保坂, 和彦

CITATION:

保坂, 和彦. 11 野生チンパンジーの肉食における狭食生の研究(X.共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 2009, 39: 125-125

ISSUE DATE:

2009-09-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166635>

RIGHT:

位尿細管の変性、乳頭部の高度なうっ血が認められた。また、心筋の高度な線維化、脾臓でのリンパ球の枯渇化、肺気腫、精巣白膜の肥厚が認められた。死因としては、事故による打撲・骨折、それに続くショック、さらに心筋線維化に伴う心機能低下が推測された。症例2：27歳以上の雄。給餌時に芋を受取り、そのまま倒れ斃死。剖検では、高度な消瘦、回腸粘膜の充出血、大腸の鞭虫寄生、脾臓における出血斑が認められた。組織学的には、肝、脾および腎臓の高度なうっ血、脾臓および腎髄質における菌塊および出血を伴う多発性巣状壊死、アメーバ原虫を伴う慢性大腸炎、慢性出血性小腸炎が認められた。死因としては、アメーバ原虫および鞭虫性腸炎、さらに二次的な敗血症が考えられた。症例3：27歳の雌。蟯虫駆虫薬を投薬4日後に死亡を発見。前日まで異常はなかった。剖検の詳細は不明。組織学的には、肝臓、脾臓および肺に高度なうっ血が認められた。心臓では心内膜下の線維化および細動脈の内膜肥厚が認められた。心不全に起因した循環障害が疑われた。

8 マイクロサテライトDNA解析による野生ワオキツネザルの繁殖構造の研究

市野進一郎（京都大・理・人類進化）

対応者：川本芳

マダガスカル共和国ベレンティ保護区の野生ワオキツネザルを対象にマイクロサテライト多型解析を続けている。これまでに1998年から1999年にかけて採取した134個体分の遺伝試料と2006年に新たに採取した76個体分の試料を実験に用いてきた。今年度も、これらの試料を実験に用いた。これまでに多型が確認できている11座位について、シークエンサーを用いたフラグメント解析をおこない、遺伝子型を決定する作業を続けた。また、新たに非侵襲的な遺伝試料を用いて実験をおこない、試料としての有効性を検討した。実験には、ベレンティ保護区で採取されたワオキツネザルの体毛および糞を用いた。糞はサンプルによってDNA収量が異なり、結果はまちまちだった。一方、体毛はある程度の量のDNAが安定的に得られた。十分に人慣れたベレンティ保護区のような場所では、キツネザルを捕獲することなく、尾の毛を採取することが可能であり、野外における非侵襲的なDNA採取に有効であることが示された。

10 ニホンザルにおける内側傾斜型電気柵反応試験

田中俊明（梅光大・子ども）、小枝登、田戸裕之（山口農林総セ）、石原淳三郎（岡重株式会社）

対応者：渡邊邦夫

果樹園の防風林から飛び込むサルを想定して、従来から使用されている直立型の電気柵と斜め内側傾斜型電気柵の飛び込み台からの侵入阻止効果について検討した。

電気柵に電気を通さず飛び込みにより侵入させる馴化の過程では、直立型柵は81回のチャレンジで96%の成功、斜め傾斜型柵は40回のチャレンジで100%の成功であり、チャレンジ回数に差はあるが、どちらの柵も成功率は高かった。しかしながら柵を通電させた条件下では、直立型柵は21回のチャレンジ回数で76%の侵入率であったのに対し、斜め傾斜型柵は5回のチャレンジ回数で0%の侵入率であり侵入を完全に阻止した。

このことから、今回開発した斜め傾斜型柵は、防風林が伐採できない果樹園で、飛び込み被害が考えられる場所において被害防止効果があることが確認された。

11 野生チンパンジーの肉食における狭食性の研究

保坂和彦（鎌倉女子大・児童）

対応者：マイケル・ハフマン

本年度は8～9月に約1ヶ月半のマハレ山塊（タンザニア）のチンパンジーを対象とする野外調査を実施した。今回は、アカコロブスの捕食が6例、齧歯類？（種不明）の捕食が1例観察されたが、同所的に高密度に生息するアカオザルの捕食は観察されなかった。アカコロブスの捕食については、いずれもアルファ雄が肉をコントロールしたが、チャージングディスプレイする間、同盟者と推測される大人雄や母親に一時的に肉を預けたり放置したりと、ヒト以外の霊長類には珍しい「近接の原理」に反する現象が見られた。また、アカコロブスの一部の群れはチンパンジーに対するmobbingが頻繁に見られるようになり、とくに大人雄のコロブスは積極的にチンパンジーに接近し、地上で逃げるチンパンジーを追いかける事例も2回観察された。それにも関わらず、マハレのチンパンジーがアカコロブスを集中的に狩猟する傾向は依然として高い。しかし、同じ季節のアカコロブスの狩猟頻度は1990年代前半に比べると減少しており、対捕食者行動が功を奏している可能性がある。今後の分析によって明らかにしたい。また、潜在的な獲物動物の音声を鋭指向性マイクロフォンとリニアPCMレコーダーを使用して収集した。次年度に予定する野外実験の刺激として利用できるか否かは、共同利用研究員として所内で閲覧・収集した文献をよく調査し、検討していきたい。